

川下の風景④

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【意図と現実】

先日新聞で、新型コロナウイルス感染症の影響で一斉休校になり、解除後に学校に行けなくなった、という子どもの体験談を目にした。特に原因なんてない、まさか自分が学校に行けなくなるとは思ってもみなかった、という言葉は私にも身近な思いとして聞こえた。

私の娘は苦勞してその高校に入った。学力的には危ういが、中学校から推薦をもらい、彼女なりに努力して合格をもらった。高校に行ったら将来の為に英語を勉強したい、そんな希望を多く語り、順風満帆に高校生活がスタートするかに思えた。そこに新型コロナウイルス感染症に伴う休校措置。卒業式も、入学式も、通常の授業すら開けない状況。約二か月の休校期間を経て、ようやく短縮授業から開始。あっという間に夏休みが来た。彼女の異変はいつからだったのか。夏休み明けから顕著に症状が現れた。朝になると腹痛でトイレから出ることも出来ない。週末は大丈夫でも、月曜日になると食事もまともに摂れない。そして、進級に必要な単位を取得できず、学校からは退学か転学の選択肢を勧められた。この間にも幾度か学校とのやり取りもあり、彼女なりにギリギリのラインで踏ん張ってきた。おそらく、それは親の期待に応えようとする行動だった、と思うと申し訳ない。彼女自身も「どうして自分は学校に行けないのか」と悩んでいたのだろうか。学校からの最終結果が出た日、娘と二人で泣いた。

人生は何が起こるか分からない。そして、それは誰のせいでもないことも多い。彼女の人生は割に順風満帆だと思っていた。それを願ってもいたが、そうならなかったことの現実の口惜しさもあった。しかし、今思えば、そんな大したことでもない。彼女は自分で選んだ通信高校に転学し、昼から夜にかけてアルバイトをしている。好きじゃない勉強を続けるより、バイト先で学ぶことが多いような気がする。

「意図と現実」これは、先日、草津で開催されている団士郎さんの家族療法研究会で言われた言葉だ。意図する未来と、現実の差。上手く行くとときもあれば、大きく軌道修正を求められる現実もある。大概は軌道修正さえ上手くやれば現実は何とかなる。問題を抱えた人は、その軌道修正が上手く出来ないのかも知れない。

【理想の老後】

高度経済成長期をひた走ってきた夫は、定年退職後の老後についてどんな思いを持っていたのだろうか。自分は散々海外や国内を飛び回ってきた。有名な観光地も廻ったし、地の人と交流を深めることで、観光ガイドにも載っていない穴場スポットや料理を食べることもできた。定年退職後の老後には、妻と共に再訪し、あの頃の話聞かせてやろう。河川敷近くの貸農園を借りて、やったことのない土いじりをやってみるのも悪くない。働いていたころは台所に立つことさえなかったが、夫婦で育てた野菜を使って料理に挑戦するのもいい。息子家族と同居す

れば、孫と一緒に暮らすこともできる。結婚して建てたこの家も古くなったし、一層のこと二世帯住宅にしてやるのもいい。それだけの蓄えと投資は出来るし、そうすることで自分が思い描く老後の未来を具現化できる。

妻は仕事が好きだ。結婚前も仕事を楽しんでいたが、子どもが生まれてからは家事の追われて働くことが叶わなかった。仕事で留守が多い夫の代わりに家を守る、そんな価値観が強い社会でもあったから、妻は一生懸命にその役割を果たした。時に厳しく、口煩い夫だが、よく働き、家族の為に尽くしてくれた、という感謝の気持ちがある。そんな夫が思い描く理想の老後。二

人でそんなことを語ったことはないが、それは幸せな未来だと思っていた。

【現実】

おそらく、途中までは思い描いていた未来だった。傍から見ても「理想の老後」「理想の家族」。お金も愛情も伴った家族像。しかし、人生は思いもよらないことが起こる。歳を重ねれば、当然病気や健康問題と対峙しなければならない。妻の物忘れ症状の顕在化。それでも最初は気づかなかった。身近な家族が変化に疎い、ということが多い。そして、妻の症状に気付いたのは妻が長く続けていたパート先だった。「最近、こんなことを言われた」「近頃、仕事の回数が減っていないか」そんな会話が夫婦間で交わされることなく、随分と気づくのが遅れた。認知症には様々な薬やケアが提案されるようになったが、現時点では治る病気ではない。徐々に病気は進行していくが、進行具合や症状の表出には個々に差がある。それは環境因子、特に身近な家族が重要な要因となることも多い。

「どうして勝手に洗濯機にさわるんだ」「ゴミはここに捨てるんじゃない」「朝早くどこに行くんだ」「勝手にお店の商品にさわっちゃいけない」夫の妻に対するダメ出しは多く、短期記憶の低下、見当識障害が顕著になってきた妻にとっては、ストレスの多い日常だった。妻のストレスは、夫のストレスにもなるし、それはお互い様だった。

二世帯住宅で暮らす息子は、そんな父の対応を責める。父の関わり方が高圧的で否定的だから母は何もできなくなる。こういう工夫をすれば、こういう関わり方をすれば上手く行くはずだ。なるほど、それはとても常識的なことだと思うが、あまりにも常識を語り過ぎていないか、と違和感がある。

【意図と現実】

夫を交えて家族会を開いたとき、夫が語った言葉は「どうしてこんなことになったのか」「治るものなら治って欲しい」「結局、私が悪いんでしょうか」というネガティブなものが多かった。妻の夜間不眠傾向に合わせて起きている夫は、疲れ果てた表情で語るが、普段、心の隅で思っていた後悔や口惜しさの思いを、家族の中で語ることがあったのだろうか。常識を語る息

子はどうか。そんな親子を見ている息子の嫁の思いはどうか。年頃の孫はどうか。そして、病気を患いながらも、かつてのように家族の中で役割を果たそうとする妻の思いは語られただろうか。

私たちの意識は、現実を紡ぐ言葉を探している。人生、山あり谷あり、と分かったような標語は誰でも知っているが、実際に現実が山なのか、谷なのか、それはあえて語られなければ分からないような気がする。それを語れる家族がいて、それを聞いてくれる家族がいて、何より理想も現実も共有できる家族であれば望ましい。私があの晩、娘と共に流した涙のように。

2021. 11. 14